

槐

かい

岡井省二創刊

平成22年6月号

平成22年6月1日発行 第100号
〒410-0001 静岡県静岡市清水区大田町1-1-1
電話 054-251-1111 発行所 岡井省二



黄心樹の花

高橋将夫

誰もかもものどかな顔の良寛忌
穴を出て蛇とりあへず藪に入る
開閉は花守がする地獄門
連風の蓮托生ふんばりぬ

凧揚がり空の中心定まりぬ
蛤が夢を見てゐる手桶かな
百点も〇点もなく卒業す
鳶去りて燕の空となりけり
誰からも憎まれぬのは春の風
黄心樹の花は一輪あれば足る
密院も人の世なりし露の臺

槐安集

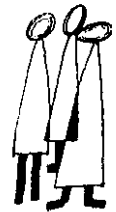
水野恒彦

朧夜の生まれくるものかぎりなし
羊水の記憶はしかと春満月
遙かなる星の瞬き告知祭
ものの影まだ地になくて柳絮とぶ
能楽師摺り足で入る春の山

延広禎一

焼 蛤 海 上 七 里 晴 渡 る
煤竹の箸使ひをり其角ノ忌
羽衣を褥としたる桜守
恋の猫わたの気持はもんじや焼
なば形の雲消えにけり春日傘

なばは中国・九州地方でまのじ



加藤みき

蜷の上に蜷ついてをり昼の月
石の上に乾びし石蓴香りたる
天明や体操の指あたたかき
皺の手の草笛もつとも高かりき
夕食やえらく日永になつてをり

石脇みはる

目はじきの目もて八十八夜かな
泣きみそのこの日は泣かず入学す
あんぐりと焼蛤の泡かな
息入れし紙風船の空にあり
黄砂降る大地に種を蒔きにけり

中島陽華

二の牛や小屋の柱の涎掛け
おぼる夜の凶星トランペット鳴れり
西王母椿と軸と茶釜の湯
伽羅の香の縮緬おぼる月夜かな
ことほぎの大川端や花筏

竹内悦子

落椿まるく染まりし浄土かな
お日様が鏡となりし黄砂かな
黒竹の杖と省二と花鮫
仰向いて櫻見てをる田舟かな
八本の桴の乱れや春の闇

栗栖恵通子

翁に山嫗に谷のさくらかな
掌の甲に齡の来たる亀鳴けり
四月馬鹿石の音なき石工村
犬ふぐり天使の梯子降りてくる
青ぬたや客に座布団裏返す

大島翠木

風姿花伝花の鼓動の中にある
陽炎のダムの故里弁財天
ア・カペラや女竹の影の春障子
うなさかにムンクの叫び春夕焼
仏壇に臍の緒を見し日永かな

雨村敏子

風信雲書春の風吹き抜ける
メビウスの帯と省二の春机
婆娑羅なる一座建立春日傘
一望も一木もいま桜かな
火の命水のいのちや桜咲く

小形さとる

春蟬や一字づつ読む回向文
さきがけて夕づく波や雛の家
なんとなう住み憂くなりし分葱かな
野遊びや勾玉の眼の子を連れて
濡れて立つ櫂のぐるりの朧かな

本多俊子

七星の濡れてをりけり梅の山
大喪をひと廻りして虚子忌かな
火星まで水汲みにいく万愚節
少年の磁石に蝶のついてくる
天地の命をろがむ春の星

久津見風牛

太陽と土まぜ合はせ春を打つ
春の暮をとこ針穴のぞきをり
黄砂降り雪降り老いの年をつむ
蛇出でてしばらく光ゲの中に坐す
雁帰り合せ鏡の妻とをり

近藤 きくえ

黒光る 大国天の あた たかし
ねこやなぎ産毛に風の 湿り めて
紅梅の色加へつつ昏れにけり
太陽のスパイス花菜ほろにがし
散る花の飛天となりて神楽殿

近藤 喜子

櫻貝拾ひたる 今日みな可とす
天上を足裏にしたる海市かな
少年の眼を 持てり 桜守
星うるむ櫛の花の匂ひけり
朝の日や沼の水みな 蝌蚪になれ

谷村 幸子

多羅葉の雄木雌木ともに芽吹きをり
暁の 杏の花を 見に通ふ
馬酔木咲く西方九体阿弥陀堂
白魚にまざり目のゆきて昼の膳
啓蟄の砂場トンネル出来あがる

瀬川 公馨

寒あけや塩干物の旨かりき
雨が叩くや紅白梅のイリュージョン
立春や貂の紅刷毛買ふとせむ
山頭火に田螺のぬたを献上す
汀にてべむべろ呆けゐたりけり

べむべろ＝猫柳の花穂

槐市集

大山里

春満月頬ずりされてゐるやうな
神の島春のみぞれに打たれけり
春のくつさめ海賊のをりしとこ
雨雨雨むらさき尽くす葦草
妹は三女雲雀野駈け出して

金澤明子

大彼岸供米の袋五・六段
雲水の鈴の音過ぎる土佐みずき
ランドセル大き曾孫よ弥生尽
連翹の黄をめぐりゆく母娘かな
モッコウ薔薇流れは岩に逆らはず

久保東海司

雪を掻き婚の荷通り易くして
式次第終り涙の卒業歌
物の芽の日毎ほぐるる山の姿なり
飽食の居間に聞こゆる匂鳥
入港の合図の汽笛鳥帰る

熊川暁子

一列はいのちの高さ鳥帰る
いつせいの芽吹は山のかゑならむ
ほろ酔のあせみはワイン色となり
下萌の色つけてゐる杖の先
パレットに溶かす十色や山笑ふ



槐集

高橋将夫選

ものの芽の朝日に影をとどむ程 大阪 久保東海司

胡坐ひとり許されてゐる籬の宴

葱坊主ひとつふたつは拗ねてをり

一刷毛の雲置き去りの春の山

凍滝に群青の空あるばかり

眼力の届く先まで霞みける 守口 柳川 晋

真相を薬味としたる朧かな

ぼつかんと異界のとびら花月夜

大名猿が食べてしまひし春の闇

黄金にて三両ほどの朝寝かな

大空は自由にとべる豆の花 枚方 中野 京子

枝々に影絵のやうに囁れり

根分けて雨やはらかに降る夜かな

歩をかさね重ねてゆくも蜃気楼

背ナを押す力の一つ春の風

ものの芽にふれて確かむ胎蔵界 東京 西村 純太

雪涅槃ひとりごころを鎮めけり

愚かなる火宅の庭に地虫出づ

此岸より彼岸へ流るる花筏

丈六と濡れてまんだら花の雨

空海に染まらぬ白さ干鯨 枚方 富松 寛子

春潮に洗ひ上げたる漬菜かな

蝶と化す菜の花の夢屋の月

桜東風根付の鯨揺れてをる

産土のはるかなりけり黄砂来る

天地に透き通るごと囁れる 谷岡 尚美

縮緬の中着を縫ふ日永かな

石鹼玉生まるる刹那消ゆる刹那

産声に調べありけり春の天

春愁や心にたたむ襷の数

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」 観照

ものの芽の朝日に影をとどむほど
小さなものの芽の影を捉えた写生の目が効いている。しかし、
写生だけではない。小さなものの芽も、その背後に既に影を持つ
ているのである。

黄金にて三両ほどの朝寝かな 柳川 晋

俳諧。「春眠晝を覚えず」で、春の朝の寝心地は格別。「春宵一
刻値千金」と漢詩にあるが、朝寝の方は三両程度らしい。

〈影が来て影と行きけり春の川 晋「槐市集」〉

大空は自由にとべる豆の花 中野 京子

大空を自由に飛べるのは当たり前。しかし、豆の花とくると、
それほど単純ではない。大空を仰いでいる豆の花の気持が伝
わってくる。そして、作者の気持も。

ものの芽にふれて確かむ胎蔵界 西村 純太

密教は胎蔵界と金剛界よりなる。胎蔵は母胎のようにあらゆる
ものが生まれ出る根源を意味する。作者はものの芽に触れて、
その世界を感じている。胎蔵界は宇宙の理、金剛界は悟りの智
慧の世界。

空海に染まらぬ白さ干鱈 富松 寛子

空の青、海の青にも染まらずに、まだ白い干鱈。浜辺に干され

た蝶の白さが目に浮かぶ。

〈門を外せとばかり春一番 寛子「槐市集」〉

石鹼玉生まるる刹那消ゆる刹那 谷岡 尚美

石鹼玉は直ぐに消えるはかないものの象徴。刹那の命である。
同じ刹那を、生まれる瞬間と消える瞬間に分けて捉えたところ
が面白い。

薪能燃やし尽せぬ闇のある 近藤 公子

闇にゆらめく薪能の炎が妖しく浮かび上がる。炎が闇を嘗め尽
くす感覚は実に良く分かる。薪能の景であり、作者の心の中の
景でもあるのだろう。

朧夜の耳底に残るビブラート 岩月優美子

ビブラートの細かく震える音と朧夜の朧な感じの取り合せが新
鮮。感性の一句。

うすうすと昼の月ある踏絵かな 松原 仲子

踏絵は春の季語。歴史的な季語で、それ自体はもう行なわれて
いないが、似たようなことは今の世にもある。それにしても、
ぼんやりした昼の月が踏絵とは、恐い話。

白魚を鷺掴みする笑窪の子 竹中 一花

白魚を鷺掴みしようとする子の所作が目に見え、ほほえま
しい。なにしろ子供は好奇心旺盛だから。この笑窪の子、さぞ
かしかわい子なのだろうが、はたして掴めたかどうか。

(以下略)